悪意の狂乱 =MAKE THEM DIE SLOWLY=

垣ノ本憲麿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪意の狂乱　＝ＭＡＫＥ　ＴＨＥＭ　ＤＩＥ　ＳＬＯＷＬＹ＝

【Ｎコード】

Ｎ４８７７Ｘ

【作者名】

垣ノ本憲麿

【あらすじ】

――――回避不能。致死量のバイオレンス――――

１５歳にして凶暴・狡猾・残忍を極めたジオ・イニセンとエリー・クランケットはレベネ島の空賊、骸狼（がいろう）を壊滅に追いやり、島の略奪品を横取りしジェンガ大陸に逃走した。

二人は、それらを軍資金に遺跡からの資源回収業を開始。ゾンビと殺人機械どもを血祭りに上げて更なる金銭を手に入れると、飛空船入手を目指し大陸最北に位置する犯罪都市キャピタルへと向かう。

しかし道中で任侠集団を自称する大陸のマフィア、神能会（じんのうかい）に命を狙

われるようになる。最初の刺客に行く手を阻まれた上に、神能会会長　神能勝偉はたった二人を“爆ぜさせる”事に執着し
殺戮職人１０００人、武装車両１００台、さらに女の手足を切断し性奴隷を量産した史上最悪の空賊バイオレントシット団残党からなるジオとエリーを殺す為だけの特別最強戦闘部隊を投入するのだった！＊本作はａｒｃａｄｉａに投稿している同名作品の遂行版（仮）となります。筆者は、ご意見・ご感想・誤字脱字の報告を心待ちにしております

violence_01　修羅と悪魔？

「なんだコレは、これから小屋の掃除をするから面倒見ておいてくださいってのか！ええ？おっさん！」
ウェストコートを着た金髪の男は、鶏を抱えたオーバーオールの中年男性の両肩を思い切り揺さぶりながら恫喝した。

空賊集団、骸狼（がいろう）による7月二度目の略奪。

レベネ島の教会前広場に島民たちは酒や食べ物、現金などを持ち寄って集まっていた。

「も、もう無いんです、家はもう金が無いんです……6月から鶏が卵を産んでなくて……」
「だったら尚更、卵を産まねぇ老いぼれ鶏を！　なめやがって！」

金髪の男は中年男性の肩を引き寄せ、ひざ蹴りを胃に思い切りを叩き込んだ。

中年の男が胃液をこぼし地面に倒れる様子に、島民たちは俯き目をそらしている。飼い主の腕から離れた雌鶏は力なく鳴いている。

ウェストコートを羽織った骸狼の仲間達はその様子をはやし立てる。
彼らは、広場中央の花壇の上にずんぐりとした胴体に短い羽のついた銀色の飛空船（ひくうせん）を停泊させて陣取っている。

彼らのボスのケルベロスは質素な木製の椅子に座り頬杖をついている。

骸狼は構成員人数１４名。中型飛空船１隻を有する大陸の都市から流れ込んだ不良青年の集団である。
ボスはケルベロスと名乗り、容姿は二言で言えばニヒルな美男子だろう。端整で鼻筋の通ったスマートな顔立ちに、つり目の赤と青のオッドアイ。髪は黒髪で肩から二寸ほど離れた長さ。グレーのスーツとズボン、赤に紫と白のストライプが入った悪趣味なシャツを着て、右片が欠けたシルバーのロザリオを下げている。

たかがチンピラが地獄の番犬を称している。が、何故かその辺のチンピラよりは頭の切れる男だ。

被害を受けるレベネ島は、南半球のジェンガ大陸に最も近く、その南方に位置。特産品は海岸の崖っぷちに大量に自生している薬草である。非常に良好な環境だが、娯楽の場といえば、週末に町の男衆が集う１軒の酒場と、教会が開放している先の広場ぐらいだ。

骸狼の最初の略奪が起こったのは2年前の9月某日、集落は収穫祭で沸いていた。男どもは酒を飲み、女たちは遊びに興じる子供たちを見守る。島民たちは広場に集まって誰もが幸せであった。

そこにやって来たのが一隻の黒い飛空船だった。堂々と広場へと突入し、子供たちが植えたチューリップやパンジーを押しつぶして花壇に着陸すると、中からボンテージマスクを被ったジャージ姿の一団が現れ、広場に集まっていた百人に満たない島民ほぼ全員をバットや鎖、ナイフスタンガンで手当たり次第に攻撃した。

この一団は終始無言で乱暴を働き、数少ない商店や民家から金品を奪っていった。歯向かった島民は、ある者は高く逆さ吊りにされ飛空船のバーニヤの噴射を焼け死なない程度の間隔で浴びせられる羽目となり、またある者は低く逆さ吊りにされ入れ替わり立ち代りに

小便を飲まされる羽目となった。

この強襲事件によって、島民たちの財産の半分以上が奪われる羽目となった。幸いだったのは、死人がでなかった事と採集した薬草は全て出荷後であった為その存在を悟られなかった事だ。乱獲ともなればこの村の貴重な財源を失う羽目と成るからだ。

一週間後、広場を襲撃したモノと同形成で銀色の飛空船がまたしても花を植え直した後の花壇に着陸した。船体の両側面には「骸狼」と、漢字の赤いペイントが施されていた。

中に乗っていたのはウェストコートを着た柄の悪い若者たちだった。彼らは、黒い飛行船の空賊から略奪された財産の一部を取り返して来た。と、金品のおよそ半分をコンテナに詰めて送り返しに来たのだった。

ボスのケルベロスは、島民を集めて堂々と次のように語った。

「このところ新興の空賊たちがこの空域に出没するようになっています。我々にはある程度の空賊と渡り合える武力を有しています。我々を快く迎えてくれるならば、この町の安全を全力で守りましょう。今回はデモンストレーションのようなものです。」

島民たちはこれがみかじめ料の要求である事も、骸狼が収穫祭を襲撃した空賊と同じ集団とも見抜いていた。しかし前以上の襲撃を受ければ集落は全滅状態に陥るだろう事と、薬草の存在を悟られて乱獲されればそれこそ死活問題だった。

しかし、ケルベロスは薬草の事を知り尽くしていた。島民は薬草を全てを賭してでも隠し通すだろうと確信していたのだ。そうなれば

毎度毎度体力を消耗し、時間を浪費する強盗をせずとも島民から確実に実りを奪えると算段していたのだ。

かくしてレベネ島は、この伝染病持ちの巨大なダニのような集団の要求に応じる羽目となってしまった。月に一度だったこの恐喝も今年の3月から月に2度に増えている。

「ゾプチックも採れないこんな村を守ってやってんだよ！　燃料無いのに報酬が瘠せこけた鶏だったら！　殴る！」
金髪の男は先の尖った革靴で追撃を加えていく。

「このまま死のうが生き様が関係ねえ！　殴って殴って殴り続けてやる！」
堰を逃げようとする男のオーバーオールを掴み上げて、唯ひたすら、追撃を加えていく。

「やめなさい」ケルベロスが椅子から立ち上がり言った。

「私は、大切な鶏を提供してくれる貴方の気持ちだけで十分です」
「ああ……け、ケルベロスさん……ありがとうございます」
鶏の持ち主は、両手を地に付いてケルベロスに頭をさげる。先ほどまでこの男を怒鳴っていた金髪の男は機嫌が悪そうな顔をして男を見下している。
と、そこに、草刈鎌を持った10歳ばかりの少女が民衆の間を縫って広場に乱入。金髪の不良を目がけて疾走する。

「きゃぁー！」悲鳴にも似た少女の叫び。先ほどまで生き生きと中年男性を殴り続けていた金髪の不良は、夢にも見なかった少女の反逆に狼狽の声を漏らした。

そこに、パン――と何かの弾けた音がこだまする。
銃声である。ケルベロスは胸元のポケットから拳銃を取り出していた。少女は、銃弾を膝に受け地面に落ちた。

驚きすくみ上がっていた金髪の男は、胸を撫で下ろす間も無く皆に見られたその醜態を誤魔化す為、手負いの少女を何度も踏みつけた。

少女は顔を真っ赤にして泣き叫ぶ。膝から流れる血は、かつて友達と良く遊んでいた広場の土を汚していく。金髪の不良は少女の服を破って丸裸にし、地面に叩きつける。少女の白い肌は紫と青のアザだらけになっていた。
金髪の不良は先の鶏を乱暴に捕まえると、地面でのたまう少女に叩き付けた。

ケルベロスはそれを尻目に、やや強い口調で島の大人たちに意気揚々と演説する。
「みなさん、勘違いしないでください。わたしはみなさんに丁寧に接しているのではありません。扱っているのです。貴方方は我々のお気に入りのオモチャにすぎない」
ケルベロスは、汗を流して少女を鶏で殴り続けている金髪の男を退かして、血と泥がこびり付いた幼女の胸に拳銃を突きつける。

「君は壊れたオモチャをどうしてきた？壊れたオモチャはこうするよな？」
ケルベロスは拳銃で、幼女の肢体を下のほうへなぞって行く。

「まってください！」そういって、幼女をかばいに入ったのは、ずっと側で倒れていた鶏の持ち主だった。
「私の娘です！お願いです！殺すなら私を……」
「……父性に負けましたよ」

ケルベロスは銃を懐にしまった。
島民達は、改めてこの骸狼という集団が、恐怖の象徴であると悟った。
だが、そこに突然、しわがれた声が島民たちを割って入ってきた。
「おい、とっくに生産性の無い耄碌したジジイとバアアが病院にいるのはどういうことだ？」

ｖｉｏｌｅｎｃｅ－０１　修羅と悪魔？

島民達の目の前に現れたこの男は、スリッパにパジャマという覇気の無いいでたちであった。
だが体はがっちりとしており、身長は１７０ｃｍほど、髪の毛は黒く短く角刈りのようなスポーツ刈りのような中途半端な短髪だ。鼻の先はやや丸く、唇はやや厚い。目蓋も厚いようでまつ毛の上にのしかかっていた。
骨相はやや頬が張っており、顎関節を支える筋肉は見るからに強靭そうだ。これだけ書くとむさ苦しいブ男だと思われるが、バランスは取れていた。よく言えば丹精な顔立ちだった。
しかし、男というにはやや幼い。だが、その漆黒の眼差しは少年と呼ぶには凶暴過ぎた。

彼が歩きはじめると、島民達は次々に道を空けてゆき、男はすぐに骸狼が占拠する広場へと入ってしまった。

島民たちはこの男について思い当たる節を次々に挙げて行き、既に騒然たる様相を呈していた。
「知らないのか？７月最初の徴収の翌日に浜辺に打ち上げられていた男だよ」
「あの男が？」
「ああ、そして完全にじゃないが記憶喪失らしい」
「それが何しに此処にきたんだ？」
「見当が付かない……」
「そういえばもう一人、盲目の女も一緒だそうだ」
「あの美人か？あの娘のことを連中が知ったらさらって行くぞ」

パジャマ姿の男は、スリッパを履いた足でケルベロスのすぐそこま

で歩み寄る。男はケルベロスと比べると背は少し低く頭身も少ないが、逞しいせいか島民たちには一回り大きく見えた。

「なんですか、貴方。見ない顔ですね」
「だから、なんだってんだ」
「なんですか？凄んで、貴方。もしかして冷酷なフリをして私達を試しているつもりですか？」
「おい、さっきから鬱陶しいんだ、その喋り方。オカマ言葉を使おうが、お前が下品なチンピラだってのはその汚ねぇ面で解るんだよ」

地べたを這いずってその場を逃げる親子に見向きもせず、しわがれた、が堂々とした声で男はケルベロスを相手に言った。それは島民たちにも骸狼の部下たちにもケルベロスに対する危険な挑発にしか見えなかった。

「オキニイリノオモチャニスギマシェーン！」
今度は何処から出しているのか？男は頭を小刻みに振るいながら、恐ろしく甲高い声でケルベロスの言葉を復唱した。

島民たちはその様子をハラハラしながら見守っている。骸狼の部下たちは苛立ちながらも男の様子を伺っていた。

ケルベロスはスーツの袖から小型拳銃を振り出して、怪人然とした男に向けた。
「なめていたたら痛い目に会いますよ。さぁ早くおうちにお帰りなさい。今なら許しましょう」

男を睨む眼差しに怒りを注いで、ケルベロスは言った。
すると男は、先ほどまでの堂々とした態度など忘れたように、スリッパをペチペチと鳴らして全力疾走で島の東へと逃げ出した！

本当に何も考えていないで骸狼に楯突いたのか？島民たちは呆れる一方で、何もかもが予想外の男の行動に驚愕していた。

「おい、おい兄ちゃん！その服いかしてるねぇ、俺にくれよ！」

「脱がせ！脱がせ！」

「まてよ～！ハハハハ！」

骸狼の内の５人は罵声を浴びせながら男を追う。

「さぁ、気を取り直して。順番に収めてください」

ケルベロスは明らかに機嫌悪く椅子に戻ると、残った部下と共にミカジメ料を再び巻き上げる事とした。

そしてしばらくの後、徴収は終わりかなりの量の食料と金品が広場に出された骸狼のコンテナに収められた。

ケルベロスは部下の一人に、今頃男をリンチしているであろう５人を呼び戻すように指示した。指示を受けた金髪の不良は、飛空船内へ無線を使いに戻った。

「皆さん、さっきの男ことで話があります。このまま広場に残っていてください」

椅子にふんぞり返って、拡声器を手にケルベロスは重い口調で島民に言った。

島民たちは、あの男について病院の世話になっていた遭難者である事心当たりは無かった。それだけに不安だった、骸狼たちを納得させる言い訳をだれも思いつけないでいた。

ともなれば、この件は島民たちの反逆行為とみなされ、養鶏家の親

子のような制裁を加えられる恐怖が島民たちの間に広まっていった。広まった恐怖は、夏の広場に異常な冷たさをもたらした。

だが、島民たちの恐怖が最高潮に達しようとしたその時だった。広場の外から木箱のようなものが飛んできてケルベロスに直撃した。

「うわぁぁ！なんだコレ！どうなってるんだ！」

ケルベロスは椅子から転げ落ちて、情けのない悲鳴を上げる。ビール瓶6本を入れる木箱がケルベロスの頭部に被さっていた。ビール瓶の破片らしきものがケルベロスの襟元から散らばって出てきた。

骸狼のメンバー7人には、血みどろに叫ぶボスを尻目に、木箱の飛んできた方に目を奪われていた。そこには骸狼の5人が追いかけた筈のパジャマ姿の男が無傷で立っている。妙な事に、変形した鉄パイプを握り締めてだ。

「お、お前は！こんなまさか！奴らはどうした！」

「酔っ払って寝ている」男は淡々とそう答えた。

そのころ、島の酒場では、5人のウェストコート姿の不良青年が、カウンターで、ビリヤード台で、床で、調理室で、気絶していた。

「な、なんなんだ！あの男は！」

「さっき逃げたのは、銃に対抗するためのビール瓶と鉄パイプを用意するためだったのか！」

島の男たちは、男が握り締める鉄パイプが、島の酒場のカウンターに飾りとして取り付けられてた手すりだと分かった。

この男は適当な数のメンバーをまんまとおびき寄せ、酒場カウンターの鉄パイプを乱暴に剥ぎ取りこれを凶器に倒したのだった。

「殺せぇぇ！早くそいつを殺んだよぉぉぉ！！」出血し、動揺しているケルベロスは泣きながら、情けない声で叫ぶ。

その声と共に、広場に居る7人の骸狼たちは、それぞれ棍棒やスタンガン、鎖にナイフなど様々な得物をもって男に襲い掛かった！

「修羅！」

男はそう叫ぶと最初に突っ込んできた不良の喉を、鉄パイプで一突きにした。喉仏を砕かれ、耳まで焦がすような激痛が不良を苦しめる。男は無慈悲にも、激痛を目で訴える不良の顔面に、鉄パイプの一閃を、又しても「修羅！」と叫んで叩き込む。

すると、男の左側から、鎖の強襲が来た。男は素早く左手で鎖を巻きつけ絡み付けると、一気に引っ張り、骸狼の1人を引き寄せた。そして張った鎖の線が背中に付くように、左足を軸に体を回し、不良のこめかみに「修羅！」という声と共に、遠心力を得た右腕の鉄パイプの一撃を与える。

この一連の動きわずか１０秒。しかし、滑らかというよりは荒々しく、力任せに得たスピードで行っていた。

男の眼光は殺気に満ち、目を合わせる事もままならない。眉間を皺にまみれさせ、歯を剥き出しにして、未知の怪物の如く荒々しく呼吸をしていた。その姿は、戦いの化身と呼ぶに相応しい。

焦りを見せる骸狼の、棍棒の一打が男の背中めがけて迫る。男は、横振りの一打を紙一重でしゃがんでかわした、そして足払いを掛け

て骸狼の棍棒使いを転ばすと、「修羅！」とやはり顔面に鉄パイプの一打お見舞いした。

パジャマの男は立ち上がり、鎖を解く、そして気絶している鎖の主にもう一発「修羅！」と鉄パイプをお見舞いした。その間に残った４人は男を囲む。

こ４人は完全に焦っていた。わずか３０秒もたたない間に４人が倒され、今や最初にこの怪人を追いかけた５人より少ない４人。４人は、ケルベロスの復帰とその銃撃を待った。

すると、無線を取ろうと船内に戻っていた金髪の不良が、ライフル状の銃を構えて戻ってきた。その姿に４人は、島民たちに向けていた不敵な笑みを取り戻す。

そのライフルは、ただのライフルではなかった。大陸の北部で入手した対人用のレーザーライフルなのだ。

「オッケイ！楽しめ！小僧！」

レーザーライフルの標準をパジャマの男に合せて、金髪の不良は絶叫した。

次いで、金髪の不良がレーザーライフルの引き金を引くその瞬間だった。「お前が楽しめぇぇぇ！」と、甲高い声と共に、ナース服姿の女が広場に疾風の如く駆け込んで、華麗なドロップキックを金髪の不良の左腕に突き刺さした。金髪の不良はライフルを握ったまま、花壇の縁から広場へと倒れた。

「こ、今度は何だ！！」島民も、広場に残る骸狼の４人もそう言葉をもらした。

violence－01　修羅と悪魔？

「貴様！」と金髪の不良レーザーライフルで反撃を試みるが、ドロップキックの主は、今度は“なにか”を不良顔面に押し付ける。

「ギャァァァァ！」金髪の不良は獣のように叫び、顔は重度の火傷を負わされていた。女が“なにか”を押さえつけられる度に泣き叫び、火傷で顔を崩していった。

女は、金髪の不良が泣き叫ぶ度に顔を引きつらせて笑っていた。

「キャハハハハハ！」悪魔の化身の如く笑う彼女の手に握られているのは、熱されたアイロンであった。

皮膚は黒く焦げるに留まらず縮んで割れ、筋繊維をのぞかせる。さらに、熱源の無いアイロンは温度を失うと、焼けた肌の一部に貼りついた。

女は、肌が焼け付いたのを解って、ゆっくり捻りながらアイロンを男の顔から引き離した。

顔が焼けて、裂けて、金髪のあちこちがちぎれている。男は白目を剥いて手足をバタバタさせていた。

仲間に行われる非道に４人の陣営が崩れた。そこにパジャマの男は、隠し持っていた手術用のメスを投げナイフの如く骸狼の１人の腕に投げつけ、続いて鉄パイプをお見舞いし、もう１人、さらに１人を「修羅！」の絶叫と共に倒していく。だが、最後の１人がパジャマ姿のスキを見つけ、ナイフで突きかかった。

しかし、女の手にあったアイロンが、ナイフの主の後頭部に襲い掛かりコレを倒した。

「エリー、てめぇは準備してろって言っただろ」男がアイロンを得物に加勢した女に言った。
「なによ、少しやばかったでしょジオ？」アイロンの主はエリーと呼ばれた少女であった。
「てめぇ、その服とアイロンをパクりやがったな」ジオと呼ばれた男はエリーのナース服とアイロンが病院から盗んだものだと指摘する。
「エへへ。似合うでしょ？」エリーは呆れた様に指摘したジオに対して無邪気な笑顔を見せた。

少女の身の丈は１６０ｃｍ程度、胸の発育は悪いが、それ正にスレンダーな美少女である。
先ほどの跳躍と蹴技は、彼女のニーソックスに包まれた細く長い脚の何処から出せるのかまるで解らなかった。ナース服から覗く肌は白く、いつか真珠のように輝やいてしまうのではないかと思わせる。先ほどまで歯を剥き出しにしていた口元も、今はピンクの花ような唇が微笑んでいる。すると、先ほどまで空賊の顔を焼き潰していた残酷な指先が、そっと自身の髪をかき上げた。その一瞬は、名画の如し、彫刻の如し美しさ、だが爆発の如く激しく、そして儚く島民たちに映った。髪は前髪をかき上げ、額を大きく空けたショートカットで、前髪から毛束が左右にチョロリと降りていた。

そのような、彼女の特徴を島民たちが把握していく中で、誰もが彼女の眼を見た瞬間、不思議なことに先の不振感を増大させた。それは二倍、三倍などといった普通の感覚ではなく、十乗にも百乗という異常な増大だ。

「あの女の目！まるで悪魔だ！」
「髪の毛も黒に染め上げてるだけだ！」

「あの二人いったい何者なんだ？」
「しかも、目が見えていたんだ！と、なると男の記憶喪失も嘘か！」
経済力・規模・信者、世界最大を誇る、サンタリア教の聖典に記された悪魔の相貌は、黄金眼に、髪は青とされていた。
エリーの虹彩は金色だった。だが、　その眼は琥珀の色よりも美しく、透明感を持って、ジオを恋人のように見つめて無邪気な少女の微笑みを称えている。
だが、先ほどまでこの少女は、ギラついた眼差しと耳まで裂けんばかりの邪悪な笑顔で、けたたましい声を上げながら高熱のアイロンを馬乗りになって、空賊になんども押し当てていた。たとえ島民の敵とはいえそれは悪夢のような光景であり、ようやく漂ってきた顔の焼けた匂いはこれが現実で起こっていると彼らに突きつけた。
それだけではない、彼女の髪の毛は不自然なまでに黒く、明らかに髪染めの使用を匂わせた。
島民たちがザワザワとエリーに恐怖の声を上げ始めた時だった、広場に女性の悲鳴がこだました。
会話に気を取られていたジオとエリーの双方は、声の方に顔を向ける。そこには島の女を左手で地面に押さえ、もう右の手で女の頭に銃を突きつけてガラス傷の痛みに耐えるケルベロスがいた。
「お前ら！早く広場から離れろ！さもないとコイツを殺す！」
ジオの暴力によって灼熱と化した広場には凍りついた空気が再び張り詰めた。
「人質か……面倒な事を考えやがって」ジオは又しても飄々とした

態度を取る。
「あんた、どうしたいの？ここから逃げたいの？不細工な部下を見捨てて」エリーはもはや痙攣しつづける金髪の不良の焼けた顔面をグリグリと踏み躙る。
「うるせえ！近づくな武器を捨てろ！」

ジオは鉄パイプをケルベロスの足元に投げた、嫌に素直だ。そして緊張感がさっきと打って変わってまるで無い。エリーは先ほど投げたアイロン以外は武器など持っていない。
するとエリーは拡声器を拾い上げ、骸狼が巻き上げた島民の財産の入ったコンテナの上に乗って声高らかに叫んだ。

「おーい！お前ら！私達、ずいぶん元気になったカラー！この島出て行くよー！だからこのコンテナの中の物しばらく貸して頂戴ね！で、飛行船使うからそこの馬鹿は逃がすよー！貸してくれないと、そこの馬鹿がお姉さんの脳みそを吹き飛ばして食うわよー！」拡声器のスピーカーからは、大声出している訳でもないのに音割れしそうな異常に張りのある声質のエリーの言葉を不気味に広めた。

島民たちは皆、耳を疑った。悪魔のようなこの少女は、暴力の限りを尽くした骸狼からミカジメ料を横取りし、ケルベロスがガラスの突き刺さった体で、ようやく手に入れた人質さえ自分の物だと主張するのだ。

島民たちにとって、二人はレベネ島に現れたアンチヒーローの類ではなかった。島民たちに2年間も煮えの湯を飲ませた骸狼さえ、叩き潰し、利用する桁外れの悪の権化であった。

「ば、馬鹿な！」　暴れる人質を押さえつけながらケルベロスは、島民たち以上の同様の様を見せていた。

「馬鹿はテメェだ、ニワトリ親子のガキをスグに殺さなかったのは親が名乗り出るのを待っていた、違うか？脅しをかけて、名乗り出るタイミングまでオカマ演説してな。テメェに人殺す肝は無い、ただの粋がったチンピラだ。だから俺たちが助けてやろう。この島にはもう用は無い」

ジオはケルベロスの側まで近づくと、鉄パイプを拾いなおした。ケルベロスは自分達の“暴力”が一切通用しない、脅しもまやかしも通用しない相手に人生最大の混乱と恐怖――――混沌と言える物を感じていた。

「あ、悪魔めが！」広場にいる老人がエリーを指差して言った。彼だけではない、ジオとエリーを囲む周囲は、ざわめき初め、大半は二人に畏怖をに覚えていた。

そこにジオは、島民たちの側へ歩きながら言う。

「ああ？悪魔……大層な言い様だな。こんなチンピラに人間の尊厳を奪われても、それでもあの、棒切れがそんなに大事か！三下どもが！恥をしるんだな！」

島民たちの三歩手前まで近づくと、ジオは村の教会の屋根にある十字架を鉄パイプで指す。

violence－01　修羅と悪魔？

「これレーザーライフルよねぇ！家一軒ぐらいだったら燃やせるんじゃない？」
当のエリーは老人の罵倒を罵倒とさえ思わず、拾い上げたレーザーライフルを島の建物に向けて何発か撃ってみせる。
「バキューンバキューン！」エリーの声とは裏腹に、無音に近いレーザー光は、島民たちを跨いで、島の建物目掛けて飛んでいく。
レーザー光線は建物を燃やしはしなかった。が、狂人の振る舞いを見せる悪魔の歌声と一挙手一投足に、島民たちの思考はかつて無い恐怖に叩きこまれた。

「まったく……調子のいい野郎どもだ。わかったなら広場から出て行け！」
島民たちはジオの言われるままに広場から出て行き、周囲から人質の安否を見守る事となった。

エリーはケルベロスを見張り、ジオはコンテナを飛空船の格納庫に運んでいった。次に、エリーはケルベロスに飛空船へ先に入るように指示した。ジオは格納庫の扉を閉め、エリーの側にいる。
ジオとエリー、そしてケルベロスは飛空船の出入り口の側に来ると、ようやく人質を開放した。

「長生きしろよ」ジオは皮肉っぽく人質に言った。
「コンテナの物は生きてる内に返すから。アディオス！」エリーは島民たちにレーザーライフルを向け、おどけた口調で言った。
そして、ケルベロスは何も言わず、ガラスの食い込んだ体を気遣う

ように、飛空船の中へと身を運ぶ。
だが、ケルベロスが戸口に手をやった瞬間、エリーは、ケルベロスの右手の指、親指除く４本を、手に持った銃ごと鋼鉄の扉で圧し切らんばかりに思い切り挟んでやった。
ケルベロスは思わぬ追い討ちに叫び苦しむ。そして挟まれた指を抜こうにも、エリーは扉に、さらに体重をかけてきた。
「ゆ、指が千切れる！」ケルベロスは全体重を使って指を引き抜こうと試みる、そこで一瞬、エリーの髪が、太陽に照り付けられ薄っすらと青味がかって見えた。

「おのれ！悪魔が！」とケルベロスが声を漏らしたその時、「修羅ぁ！」ジオの鉄パイプの一撃が、扉に挟まれたケルベロスの右腕の間接に注ぎ込まれた。
「ハゥア！」と、ケルベロスは声をひり出すと、次には激痛が脳を支配していた。
挟まれた右手の指は攻撃の衝撃でズルリと、扉から抜け出していた。しかし、指の皮膚は破れて、血はドクドクと花壇に降り注いでいた。そしてヒジは完全に粉砕されてしまい、腕は間接と反対の方向に垂れていた。

間もなく地に膝を付いて、完全に戦意を喪失してしまったケルベロスだったが、ジオは情け容赦ない。「修羅！」と叫んで叩き易い位置にあったケルベロスの頭部を、横から思い切り鉄パイプで殴った。ケルベロスは壊れた自分の右腕を下敷きにそのまま倒れてしまう、しかし、ジオはケルベロスの頭部を踏みつけて、体に何度も鉄パイプを叩きつける。
「修羅！　修羅！　修羅！　修羅修羅修羅！　修羅！修羅！修羅修羅ぁ！このどさんぴんがぁ！修羅！修羅ぁぁ！修羅ぁっぁ！修羅！修羅ぁぁぁ！」何度も何度も叩きつけた。
村人たちはその圧倒的な暴力にひたすら脅えていた。

ジオはケルベロスを虫の息にすると、唾を吐き付け、面倒な仕事を終えたような表情を浮かべ、飛空船に駆け込んだ。
エリーは横たわるケルベロスの股間に無意味に蹴りを入れると、ジオに続いて飛空船に駆け込んだ。

やがてエンジンに火が入り船底が地面をえぐる様に、バーニアの勢いのままに発進した。
だが一向に離陸する気配はなく、殆ど腹ばいの状態で骸狼の飛空船は港の方向に進んでいく。

「な、なんなんだあいつら……」
「惨まじすぎる……」
といった声が聞こえるも、島民の殆どは言葉さえ失って、ゆっくりとその様子を遠めに見ていた。

そのころ不気味な行進をつづける飛空船の内部では、ジオとエリーが四苦八苦と、コクピットの複雑なパネル操作を行っていた。
「っ糞！意味がわからん！自動車なら動かせたのによ！」ジオは乱暴にレバーをこじるように動かす。
「レバー上げてみてよ！」
「もうこれが目いっぱいだ！だから船の準備をしてろっつたんだこの糞アマ！」
「うるさいわね！船の準備は出来てるのよ！いいからレバーを動かしてみなさいよ！安全装置でもかかってるんじゃないの？」
「うるせえのはお前だ！もうなんでも良いからボタン押せ！」揺れるコクピットで離陸を試みつつ、レベネ島の港に二人は舵をとる。
島にある3隻の船はどれも漁船で、エリーの用意した船にも魚臭さが残っている。

なんとか到着したジオとエリーは飛空船を諦めて、荷物の入ったコンテナを大慌てで積み込むと、一分も立たない内に出航した。
大事な漁船を持っていかれた島民たちだったが、やはり遠めからその様子を眺める他はなかった。

――――2時間後、レベネ島はもう船からから見えなくなっていた。

「ダサい服ね」甲板で、エリーはコンテナの中からわずかばかりの女性用の服をあさっていた。
「今の白衣のよりマシだ」舵を取るジオはこう切り返した。
「あんたのパジャマよりマシだもん」
「パジャマ姿はベッド上だけにしてほしいってか？くだらねぇ」
「そういう事言ってるんじゃないの！連中の服でもかっぱらえば良かったじゃない！」
「あんな悪趣味が着れるか」
ジオはそう言うと、肉の缶詰と十得プライヤーを、パジャマのポケットから取り出す。

「ああ！またケンカの後に何か食べようとする！また太るよ」
「いちいち　うるさいな！お前にもやる」
「いーらない！」
エリーは甲板に寝転がって天を仰ぐ。雲ひとつ無い夏の太陽の光が、彼女の白い肌を透き通るように見せた。

ジオはその様子をチラチラと意識している。
「……やっと、自由って感じね～、私達」
「自由というには思ったよりも面倒が多い。結局1年も時間を浪費した。しかも飛空船は手に入らずじまい……」

「大丈夫よ。少なくとも当分食べものに困らないし、６０万Ｚ(ザップ)もあれば武器も買える。次こそ飛空船を手に入れたら“あの島”に……」
「地図にも載って無いんだぞ。武器と飛空船を手に入れてもぶち殺しに行くのはもっと先だ」
「んもう！あんたは何かプランがあって私に文句言ってるの！？」
エリーは膨れていった。
「とりあえず６時間も飛ばせばジェンガのネディアって町に着く。そこでコンテナを整理して旅客飛行船に乗ってキャピタルに入る。後はキャピタルでゾプチック採掘でも始めるさ」
「……流石ね。惚れ直したわ。じゃあキャピタルに着いた一緒に自由をかみ締めてくれる？」
「かみ締めるっつてもなあ、今でもあの島に居るよりはマシだからなぁ……」

そう答えたジオの後姿が、どこか悲しげにエリーには見えた。

「……ジーオ♪」エリーは甘えた声で、ジオの腕右に手を絡めて、ガサガサしたジオの右頬にキスをした。
「いちいち　くっ付くなこの馬鹿が」ジオはエリーの腕を解く。
「うれしかったよ、アンタが怒ってくれたの」
「えん？……いや。いーや、アレは俺を悪魔呼ばわりしたからだ」
「照れるな、照れるな」
「勘違いも大概にしろ糞アマ、あの老練たる眼光と節くれだった指先は間違いなく俺をさしていた」
「被害妄想が思わぬ悲劇を引き起こすわよ」
「妄想も何もあの老練たる眼光と節くれだった指先は間違いなく俺をさしていた」
「別に、私は気にしてないのよ。悪魔なんて褒め言葉の内よ」
「被害妄想はテメェのほうだ、老練たる眼光と節くれだった指先は――――」

1

西暦世界の終焉と後続した天変地異によって、大陸の多くが歪み縮小し、海上にはポツポツと小さな島々が浮かび、島ごとに自治が行われ、縮んだ大陸の内部でも民族・派閥が自決、小国家が乱立する状態となった。

散り散りになった人々を結びつけていたのは、飛空船と呼ばれる旧暦世界の遺産であった。

飛行機と書くには翼は短く、ずんぐりとした胴体部、最後部に取り付けられたロケットノズル状のパーツから推進力を得て、各位バーニヤでバランスを取り、空を翔る飛空船。

航空力学を逸脱できる程、膨大なエネルギーを生み出すゾプチックと呼ばれる燃料が、音速以下の飛行スピードという条件下での、大量輸送・長時間飛行を実現していた。

だが飛空船は、人々の暮らしを豊かにする一方で、人々からあらゆるを奪う武装集団の存在を許した。空賊の台頭が始まったのである。

その体系は、すでに多様化の一途をたどっており、大多数の成員数を抱え飛空船連帯を持つ大所帯も存在すれば、構成員は少なく先端機械武装に頼る資金力と技術力のある組織、マフィア・ギャングの延長上の組織、　ただの粋がったチンピラの集団まで広がっている。収入手段も異なっていた、盗みや強盗といった賊らしい略奪は基より、遺跡の探索によるゾプチック発掘の独占、みかじめ料を称しての恐喝、ろくでもない物や厄介な物を売りつけ風紀を乱す、最低の所では殺人から誘拐・人身売買まで悪逆非道を尽くしていた。

人々はこれに対抗すべく軍備を進め島々の結束を強めていくのだが、民主主義による自治と君主制による自治。両者の溝は大きく新たな争いの火種となっていった。
やがて、民主主義国家陣営は併合し、ビトー共和国が発足する。これに対抗すべく、専制君主国家陣営も合併を試みるも、有力勢力が内部抗争を勃発。
しかし、この抗争を僅かな間にカーツ一族が鎮圧させる。これによりカーツ一族を皇族とし、一族以外が収める土地を属国として、カーツ帝国が発足する。
両陣営は、世界の陸地の全貌を明かせていないままであった。両陣は冷戦状態に突入し、未所属の国家を併合もしくは植民地にすべく、世界の開拓を開始した。
時は新暦５０１１年。西暦世界の愚かしさを知る術は何処にも無い。

violence－02　ネディア？

ジェンガ大陸は南半球に位置し、その北方は赤道に近くある。
北部ではマフィア・ギャングら犯罪組織が群雄割拠の様相を見せ、南部から中部は任侠集団自称するヤクザ組織が統括するが、いずれも治安が悪い。

しかし、これら地上の犯罪組織の勢力が強かった為に外界の空賊勢から被害を殆ど受けなかった。結果、多くの遺跡が残り、豊富なゾプチックの収穫元であり続けた。遺跡の探索が普及するようになる５０年前には古代技術の博物館と呼ばれ、多くの技術が現代に転用される事となった。

遺跡内部からゾプチックや古代技術を発掘することを生業とする冒険者を、シーカーと呼ぶ。
ジェンガ大陸は、遺跡のレベルのムラが多く、実力に合わない遺跡に閉じ込められ、命を落とすシーカーが多々多くいた、しかし中には南から北まで発掘しながら縦断し、一財産築いた者もいた。このような背景に、大陸が赤道付近に位置していたことから、ジェンガ大陸はデッドラインとも呼ばれている。

1

ジオ・イニセンとエリー・クランケットは奪った漁船から、ネディア南港の桟橋に姿を移していた。

陽は沈み始め、曇り空に様変わりしていた。
ジオは今になって出てきた鎖を受け止めた左腕のアザを気にしながらも、エリーと共にレベネ島から奪ったコンテナの両端をつかんで、

桟橋を2歩3歩と……やがて大陸の大地を踏みしめた。

二人は港に立ててあった周辺地図で、飛空船の定期便乗り場を目指した。

エリーの服装はデニムのスカートとジャケットに白黒横縞Tシャツ。デニムの生地が新しい為、青々と色が濃くブーツも新品で綺麗過ぎだ。金色眼を隠すための太い枠のサングラスは彼女のショートカットにはまるで似合わない。15歳の少女とは思えない酷い服装で、本人も臍を曲げている。

ジオはというと、白に近いグレーの作業ズボンに緑のシャツ、あまりにも質素だ。

陽は沈むもまだ生暖かい潮風が吹く港町を歩くこと30分強、港から西に位置する飛空船定期便乗り場に着いた。だが、大きな門を過ぎた後、建物の入り口は、格子状のシャッターで閉ざされている。人の気配は、その乗り場と思わしき建物の側にある小屋からのみ感じられた。

「エリー、すぐ側でまってろ。お前の目を見て騒ぐような馬鹿だったら面倒になる」

「あいあ〜いさー」

ジオはエリーを置いて明かりの漏れる近くの小屋へ歩いていく、警備室であった。

「こんばんわ」ジオは扉から顔をだして言った。

警備員が椅子に座ってポルノ雑誌を眺めていた。

「なんの用だ？」警備員がポルノ雑誌を畳むと、髭の濃く浅黒い顔が現れる。そして機嫌悪そうに立ち上がった。

「キャピタル行きの定期便の来る日時を知りたいんだ。なにか日程表のような物は無いか？」ジオは警備員に尋ねる。
「へ、飛行船は当分こねぇよ」警備員は下卑た笑顔をジオに向けて言った。
「なに？どういう事だ！」今度はやや声を荒げて、ジオは聞いた。
ジオの声を聞いたエリーも部屋にやってきた。
「飛行船が来ないって？」
「へ、何も知らねぇんだな。帰りな、ガキどもが夜に出歩くな。ちちくりあってねぇで、帰ってマスでもかいてろ」
そう言うと、警備員は再び椅子に腰を下ろそうとする。
だが、エリーは警備員が椅子に座る直前に、キャスターの付いた椅子を蹴り転がした。椅子は部屋の奥へ転がり、警備員は尻餅をついた。警備員の目の前には、白く美しく妖しいエリーの足が伸びていた。

「何しやがる！」警備員は尻餅をついたまま怒鳴る。
すると、エリーはサングラスを外す。黄金眼は警備員を嘲笑するのだった。
「う……」警備員は悪魔を想像させる少女の瞳に言葉を失った。
「どうして来ないのか教えて～、スケベなおじさま」
エリーはポルノ雑誌を丸めて、警備員の頬をポン、と叩く。
警備員は机の脚にしがみついて立ち上がり、語り始めた。
「……キャピタルが、ビトー共和国に併合されたんだ」
「併合……！？」ジオは不思議そうに言う。

「それで共和国の法律やら、なんやら税金やらでモメててな、ちょうど大陸の真ん中から南は……南を仕切っている神能会（じんのうかい）はビトーに付くのに抵抗してんだ、ウチの社長もそんな感じでな、当分キャピ

タルとの連絡船は無いんだ」
「……そうか」ジオは何時もよりしわがれた声を出す。
「いや、だがいづれは終わるね。社長や神能会の狙いはゴネるだけゴネて示談金を貰おうって腹だ」

「で、終わるのはいつ頃」エリーも残念そうな声を出した。
「半年後ぐらいか……まぁ他に行き先がないわけじゃねぇ。南の方にはいくらでも船は飛ばせられるけど」
「遠慮しておく、エリー行くぞ」
「ばいばーい！」

二人はその場を去った。

ジオとエリーはその後、できるだけ安いモーテルを探し出した。一泊１５００Ｚ（ザップ）。かび臭くは無いものの、少し湿った感じのある部屋であった。
レベネ島から奪ったコンテナを部屋の隅に置くと、エリーは庭用ホースで補修されたシャワーを浴びる。ジオはベッドで寝転んで眉間に皺を寄せ天井を眺めていた。

とある事情で、辛酸を舐めさせられた故郷の島をエリーと共に離れる事一年、行く先の島々でトラブルに巻き込まれ、暴力沙汰に発展。島を追い遣られ続け、とうとう無一文でレベネ島に漂着し、仮病をつかって病院の厄介になり、ようやく空賊を出し抜いて軍資金を得たというのに早々に道行を阻まれた。ジオが苛立った表情を見せるのも無理は無かった。

「だいぶ色落ちてるわ、染め直さないと」シャワーを浴びて抜けたエリーの髪の毛が、青みを見せていた。エリーは金色眼のみではなく、髪の毛も異常な青い色をしていた。

エリーがバスタオル一枚でシャワーから出てくる。彼女の目の前には、ベッドに横たわって険しい顔をしている恋人の姿があった。

「なーに怖い顔してんのよ」

エリーはその姿のまま、ベッドに飛び込んで寝転がるジオに抱きついた。しかし、ジオの顔は天井を向いたままだ。

「どうする？半年待つ？」エリーはジオに優しく問いかけた。

ジオは、エリーの腕をどかしてベッドから立ち上がる。そして窓の外を眺めながらこう言った。

「半年もあったら歩いてでも北に行ける。ただ、もっと早く北に行けると思ってた。今朝の飛行船も操縦できないであきらめちまったし……」

「しょうがないよ。でもやっと、纏まったお金が手に入ったじゃない。そんなにクヨクヨしないでよ」

「クヨクヨなんかしてねぇ。俺は大丈夫だ」

「嘘。それか自分で気づいていない」言葉の反面、エリーは明るげな口調で言った。

「……いいから早く服を着ろ」エリーに背を向けるジオの顔は赤かった。

2

二人は遅い夕食を取りに、ホテルに最も近い酒場へと入っていった。

「いらっしゃい」バーテンが店に入ってきたジオとエリーに言った。

木目の粗い板でできた壁と床が、橙色の電灯に照らされる店内。ビリヤード台やダーツ、円卓に2～6人ほどの集まりが幾つか見受け

られた。

ジオとエリーはカウンターに腰を掛けた。

「スパゲッティーって言うのを2つ。あと、酒。ホワイトイカーでいい」

「安くてもストレートは駄目！体壊すよ」

「うるせぇな。酔えりゃなんでもいいだろ」

「スパゲッティーは分かるが、彼女未成年だろ？酒は無理だ」

「えん？別にいいだろ」

「なにも良くないよ。帰ってくれ」バーテンは声を低く凄んで言った。

「じゃあ、スパゲッティーと水二つ。俺も未青年、１５だ」

「……」

しばらくしてミートソース・スパゲッティーと水が二人の前に置かれた頃には新たに3人ほどの客がエリーの横に腰掛けていた。

「これ、どうやって食べるんだ？箸は？」ジオはバーテンに奇妙な事を尋ねた。

「何？……その、フォークで巻きつけて、食べろよ」

バーテンはおかしな事を聞く客だと不信に思うが、面倒ごとを起こすような気配には見えなかった。フォークを力いっぱい握り締めてスパゲッティーを必死に頬張る二人を見ている内に変な客だと思う事にした。

ミートソースは、酒場という事で、酒の進むようにトマトの仄かな酸味を残した調理がされ、安い挽肉の嫌な物を見事に潰していた。

ジオとエリーはスパゲッティーを３０分かけて食べつくした。

「エリー、その水飲まないならくれ」ジオは先にコップの水を飲みつくし、エリーのコップに残る水を求めた。
「いいわよ」エリーは快く了承し、コップをジオに渡す。
「関節キスね」エリーはジオを嘲笑うように言った。
「やっぱいい」ジオはコレに呆れたように返す。
「今更なに意識してんのよ、もしかしてそういう年頃？」
「誰がお前なんかと間接キスするか」
「……間接キスがいやならお前の鼻からのませてやるよ！」
豹変したエリーはコップを取り上げるとジオの顎をつかみ、顔を天井に向け、鼻に水を注ぐ。

「なにしやがる、この糞尼！」ジオは咽ながら叫ぶ。
ジオがエリーの手をはらい退けるとコップの水は、カウンターに並ぶ男3人のうち、エリーの隣に座る1人にかかった。

「なにさらすんじゃい！」水がかかった男は立ち上がり怒鳴りあがる。
「すみません」ジオは早々に頭を下げた。

しかし、並んで座っていた別の2人も立ち上がって睨みつける。3人とも、絵に描いたような人相の悪さに、派手なだけで安物の服装に身を包んでいた。

「済むかぁぁ！弁償してもらうからの！オウ！」
「馬鹿じゃないの？水だからすぐ乾くじゃない」エリーが声を張り上げて言った。
「なら誠意だけでも見せてもらおうかのぉ！お嬢ちゃん！」
3人の矛先がエリーに向けられた事もあるが、ジオは3人に余りに横柄な態度に怒りを覚える。
「黙れ、元々お前らみたいなのに許されても何も嬉しくない。謝っ

てもらっただけでも有り難く思え」ジオは謝罪を清算するかのように挑発した。

「てめぇ！舐めてんのか！！」

「あんたたちの不細工な顔のどこに舐める余地があると思ってるの？顔の皮でも剥がさないと無理だね。」エリーは男の１人の顔をペチペチと、軽くはたきながら言った。

「このガキ！股から膿が出るまで輪して、ぶっ殺したる！」

男の一人が懐に手をやった。酒場は一触即発の緊張感を漂わせる。

「そこまでにしとけ」店の入り口から男の低い声が割って入った。ジオとエリー、チンピラ3人、そして店員と店の客は、一斉に入り口に目をやった。

「誰でい！すっこんでろ！！」チンピラの一人が店に入ってきた男に吠える。

「まったく、古いセリフだ。クールじゃない……」男はやや沈んだ声で言う。

声の主は、髪は背中まで伸びた白い長髪。しかし年齢は２０代、その身長は２ｍ近くある超巨体。スマートな頬のラインに、やや大きな下顎が不釣合いに見える意外は、美男子のそれであった。筋骨隆々にも関わらずスマートなラインの身体にグリーンのカーゴパンツに赤いレザー製ライダースジャケットを身に纏う。その上から腕と脛に黒いプロテクターを嵌めており、丸サングラスを付けていた。

彼のサングラス越しの眼は戦意を秘める。だが、その眼光は炎のように滾る事はなく、爆発に向け導火線を疾走する火の如き緊張感と静けさ、威圧感を思わせるのだ。

violence－02　ネディア？

「おい、ヤレ」ジオに因縁をつける男は、別の二人に言った。
二人は、巨漢に近づいてナイフをチラつかせる。ナタのようなナイフであった。
「どうする？2対1、いやガキはスグに片付いて3対1だぜ！」ナイフを上段に構えたゴロツキが言う。

「聞き飽きた台詞だ、子供の頃からＴＶで何度も聞いた。なつかし過ぎて涙がでてくる」巨漢は腕を組んで呆れたように言った。
「さっきから何が言いてぇんだ！死ね！」
チンピラ二人は、巨漢男に切りかかる。一人は縦に、一人は横に、大振りの一太刀を男の頭部へ放った。

巨漢はそのわずかな間に組んでいた腕を解いた、そして巨漢の周囲に赤い閃光が走った。同時に巨漢は、閃光を放った一瞬、たった一歩だけ後退し、二人の放った十字撃を完璧に回避した。

ナイフを振り下ろしていた二人のゴロツキは凍り付いた表情を見せた。
「俺の技も古いのだがな……」
ゴロツキ二人のナイフの刀身は、半月型に切り抜かれ、刃を失っていた。ナイフだった金属は、鮮紅色を帯びる。
“ナイフだったモノ”の柄を握るゴロツキ2人は、「う、うわぁああああ！」と、叫びながら店から逃げ出した。

「さぁ、どうする？一対一だぞ？」巨漢は残ったゴロツキに聞いた。
「う、う……」ゴロツキは戸惑いを見せる。

「いや、3対1だ」
「誠意ってものを見せてくれないかしら？」
ジオとエリーはゴロツキの背後に立って呟くように言った。
「て、てめぇ！」ゴロツキはジオに銃口を向けて啖呵を切った。
引き金を引こうとも、もう一言ドスの利いた言葉をぶつけようとも考えたゴロツキだったが、奈落の底のようなジオの眼と、不敵かつ不気味かつ強烈なエリーの微笑が彼から一切の思考を奪った。
「ぬぅ……ち、畜生！覚えてやがれ！」ゴロツキは一喝叫んで店から逃げ出した。
「悪いやっちゃな～」ジオとエリーを見下ろして巨漢は言った。
「おかげで面倒にならずにすんだ、ありがとう」
「私からも、ありがとう」
ジオとエリーは巨漢に言った。
「フフ、俺が出なくてもその皿でどうにかしていたんだろ」
巨漢はジオとエリーの手に付いているスパゲッティーのミートソースを見て言った。カウンターで不自然な位置に置かれている皿に残っているソースには、きっちり二人の指の型が付いている。
（こいつはスゲェな……俺と互角ぐらいか？）
（すごいわ、ジオでも負けるわ、島を出て初めて……こんなのに会ったのは、ジオと私一緒で首の皮一枚で勝てるか……）
（どうやら、俺が助けたのはゴロツキどもの方のようだ……この二人……何か得体の知れないこう、オーラとかなんかそんな感じのアレを持っているな……クールだぜ）
ジオ、エリー、そして赤いレザージャケットを身に纏った身長2m

あろう若い巨漢は静かに、そして敏感に、お互いの強さを感じ取っていた。

そして未だ店内を包む静寂の中でジオは言った。

「兄さん、名前は？」

「フッ……名乗るほどのものじゃない」巨漢はほくそえんで答えた。

「そのキザ野郎はブルース・ファウスト。うちに５０００Ｚのツケを作ってる」カウンターのバーテンはあっさり名前を言った。

「だぁぁぁあ！！人がクールにキメ殺してる時に何ってんだオヤジぃ！」ブルースと呼ばれた巨漢はバーテンに憤慨した。

「クールに振舞いたいならいい加減にオヤジはやめてマスターと呼べ」

「……っぷ」エリーは笑い声をもらした。

「んなぁぁぁぁぁ！」さっきまでの落ち着いた装いとは打って変わって巨漢は喚く。

「ンフフ、ごめんなさい。私はエリー・クランケット。宜しくねブルースさん」

「俺はジオ・イニセンだ」

「……ブルース・ファウストだ」少し間を置いて、巨漢ブルースは答えた。

酒場には、騒がしさが戻っていた。

「ふぅ……見苦しい所をすまん。まぁとりあえず一緒に食事でもどうだ？」

「いや、食べた所よ」エリーは言った。

「そうか、残念だ」

「俺たちは帰るが、さっきの、ナイフのアレはどうやったんだ？教

えてくれないか？」ジオは、ブルースの放った閃光について問いだす。

ブルースは腰に吊下げた懐中電灯ほどの大きさの筒を外してみせた。

「ゾプチックカートリッジを使用したビームブレードで、ザ・俺専用。ビーム刃は一瞬のみ出てくる。居合用だな、一瞬だが威力と範囲は抜群だ。俺ほどならこれでマングラー潰すのから、ガーデニングもできる」

「おー」パチパチとエリーは拍手して言った。

「そりゃスゲェな。ありがとう。マスター、お勘定」ジオは財布をポケットから出す。

ジオとエリーがレジに付いた従業員に１０００Ｚを渡そうとした時、ブルースはカウンターに腰かけた。　そこに、バーテンは「で、今回の冒険の収穫は？」とブルースに話かけた。それを聞くなりブルースが機嫌の悪そうな顔をしていると、ジオとエリーが再び寄って来て質問をした。

「あんた、シーカーか？」と、ジオ。

「おお、その通り」

「なら、この辺で初心者に向いている遺跡ってないか？」

「３時間歩いて北に行った所にあるビュシューの遺跡だな。サンゲが素晴らしいとしか言い得ようがないほど弱い。が、上位クラスの広さがあるから迷わないように気をつけろ。だがその分まだ未発掘の場所が多い。大量のゾプチックが出てくる可能性もある。装備を揃えたいなら、バゴス通りにシーカー相手に商売してるジャンク屋があるぞ」

「わかった。ありがとう。恩に着るぜ、５０００Ｚのツケは俺が払う」
そういうとジオは６０００Ｚをレジ係に支払う。
「ちょっとジオ！」エリーはそれを見てジオを咎める。
「お前は黙ってろ。いいんだ」
「悪いねぇ～」ブルースは満面の笑みで言った。
「お前、会ったばかりの１５のガキに立替てもらって情けないぞ」
バーテンが言った。
「え？１５？」

「おっと、忘れてた」ジオはそう言うと、フォークをレジに置いた。
「あ、私も」それを見てエリーも、フォークをレジに置いて２人は店を去った。
先ほどのケンカ沙汰の際に隠し持っていた物だった。
「あのチンピラども、一生分の運を俺の登場に使い果たしたな……」
ブルースは呟いた。

「で、アンタは今日何所を探検していたんだ？先輩さん？」バーテンはニヤついてブルースに聞いた。
「……ビュシューの遺跡です」ブルースは力なく答えた。

３

ジオとエリーは宿に向かって歩いていく。しかし、エリーは怒りを露にジオを問い詰める。
「なに考えてるのよ！金が手に入ったからって調子に乗ってどうするのよ！」
「此処でゾプチックの発掘をやる」
「え？」エリーはジオの答えに驚いた。

「どうせ俺らはシーカーでもやらねえとまともに稼げねえ。雇ってもらってもガキだつって上前をバカみたいに撥ねられて殴り合いになるのがオチだ。住むにしろ、北に行くにしろ、シーカーになるしかねえんだ」
「とどのつまり、シーカーになる準備は此処で済ませておいて、車なりバイクなり買ってキャピタルに入る訳？」
「ああ」
「でも５０００Ｚも渡すなんて信じられないわ！」
「うるせぇ女だ……でも、俺もなんで金なんか渡しちまったんだ？」
「なによそれ！」

空を覆っていた雲はどこかへと消え、月光の下、口ゲンカを続けるジオとエリーがいた。

violence－02　ネディア？

7月21日　朝10時頃

「どれも便利そうだが高いな……」バゴス通りとよばれる街道の一軒のジャンク屋でジオは言葉を漏らした。
ジオとエリーは、ブルースの助言通りジャンク屋寄っていた。

この時代のジャンク屋は旧暦の物とは大きく異なる。冒険者が遺跡で手に入れた古代技術を有する機械部品とゾプチックの買取を引き受け、飛空船の部品や燃料としてゾプチックを売っている。そんな流れでサンゲ対策用の武器や、暗闇の冒険を快適にする商品も売るようになっていた。ジャンク屋とは名ばかりの兵器流通市場が形成されていた。

店内は薄暗く、ショーケースに無造作に付けられた蛍光管が商品を照らしている。充満する機械油の匂いは、好きになれば心地の良いものだが、ジオとエリーは不快感をもっている。

「ジ～オ～、いい加減何買うか決めたら～。ひょっとしてコレだけで探検する気？」商品を見物するジオの傍でエリーは言った。
「しょうがないだろ、あれこれ買ったらスグ破産だ」
「だって私は野に舞う蝶のようにか弱い女の子よ、危ないじゃない！」
「まだ寝ぼけているのか？それとも馬鹿か？お前は島の鹿の大将に着いて行ける足は速いし、最後にはあの大将、俺がカゼひいたときに鍋にしたじゃねぇか。蛾の太い触角のようなオトコオンナだ」

「オトコオンナだと！ジオ！」と、声を荒げるエリーであったが、ジオをおちょくるのに最高の発想が生まれた。

「ジオ、あんたそういう趣味なの～？なんなら今から私自分の事、僕っていおうかしら。いや、いおうかな～♪」

ジオは無視する、とも考えたのだが、照れているように思われるのが嫌だと思いこう言った。

「だったらどうだって言うんだ？勝手に言ってろ、勘違い女め」

「素直じゃないね、素直に僕みたいに見習いなよ」エリーは自身の文法が無茶苦茶だと心の中で呟いた。

しかし、当のジオは内心でエリーが「僕」という、この際卑猥な一人称を使う度に彼女を可愛いと思うのであった。

「おい！何買うんだ！早く決めろい！」その様子を見かねた店主がレジで叫んでいる。

「うるせぇ、今のうちに勘定誤魔化す準備でもしてろ」昨日からトラブル続きだったジオは、店主にさえ不信感を抱いている。

「喧嘩売ってるのか？」店主は声のトーンを平常位置に戻してしまった。

「こんな油臭い店から、僕は売上の期待は店からしないから売らない」

エリーは無理に変えた一人称の為にチグハグな言語を発する。

「お譲ちゃん、馬鹿かい？」

「こんな汚い店に、僕たちの喧嘩を買う金はあるのかい？」

（……エリーに麗装はアリだな……）ジオはつい、物思いに耽っていた。

「出て行けぇ！！」
レジで叫ぶ店主に、我に帰ったジオは、満杯の商品カゴを差し出した。続けてジオは言う。
「これと、あと武器」
「……なんだ、買うんじゃないですかお客さん」
「でていけ～。でていけ～。デテイケー」エリーはおどけた口調で言った。
「上客は話が別ですよハハハハ……もうヤだなぁ」

ジオとエリーはフェンスで仕切られた店の奥の武器コーナーに案内されると様々な武器を目の当たりにした。

ライフル、マシンガン、拳銃、バズーガ、剣、棍棒。変った物では、ハサミのような形のものから、野球のグローブのような形のもの、マッチ棒のようなものまで様々だ。無論、その用途、特性は異なってくる。その中には、彼らが空賊から奪ったレーザーライフルのような物も多く見られる。

「ねぇ、おじさん。コレの性能分かる？もらいものなの」
エリーは骸狼一味から奪ったレーザーライフルを差し出した。
店主はそれを手に取ると、作業台に持っていき手早く分解し、導線をつないで小さなモニターに数値を映し出した。
「対人用のレーザーだな、ビトー共和国領に正式に入ったら使えなくなる。それにマングラーの装甲を打ち破るには熱が低すぎる。ただビュシューのサンゲどもを殺すには十分だよ。」

「おい、どうして俺たちがビュシューに行くと解った？」
「お客さんの商品のラインナップ、そのまんま『はじめてのゾプチック探索』のまんまですよ。このへんでド素人が入れるのはビシュ

ーだけですからな」

結局、彼らはヘッドライトや戦利品入れ、ヘルメットにプロテクター、非常食や水に応急手当用品、救難信号発生装置、手榴弾、などを購入、合計は９７８０９Ｚであった。

（１０万いかなかったか……適当言ってライフル一丁買わせとけば良かった。）店主は心の中でぼやいた。

「おい」っと、そこにジオが声をかけた。

「ああ、いえ！なんでもないです」

「えん？なに言ってんだ。コレいくらだ？」ジオは店の奥から１ｍ強はある金属製の棒を持ってきた。

「そ、それですか？大型マングラーの残骸から出てきたシャフトかなんかだそうで、硬くて丈夫な棒です」

「おじさん、なんで完全に敬語になってんのよ？」

「幾らだ」

「……３０００Ｚです」

合計１０万８０９Ｚ也

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4877x/

悪意の狂乱 =MAKE THEM DIE SLOWLY=

2012年1月2日18時51分発行